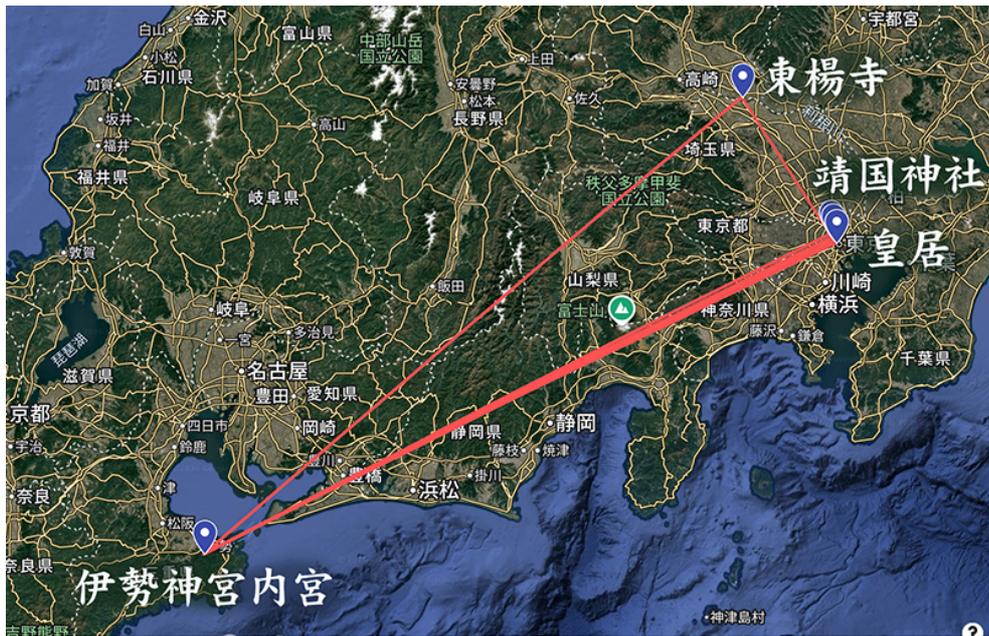


# 伊勢神宮と東京皇居 ~伊勢神宮のご神気を皇居に引き寄せる~



伊勢神宮内宮

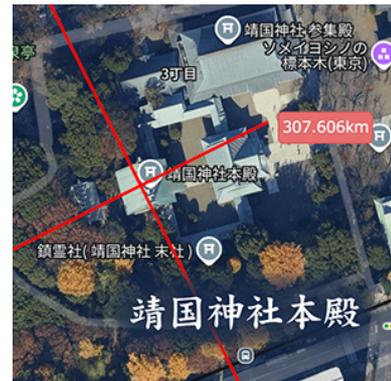


皇居 宮中三殿 賢所

※Wikipedia より拝借



- 皇居宮中三殿賢所 → 307.606km → 伊勢神宮内宮 ← 307.606km ← 靖国神社本殿
- ← 307.606km ← 赤城出世稻荷神社  
八耳神社・葵神社
- ← 307.606km ← 護国寺
- ← 307.606km ← 東楊寺



■ 伊勢神宮内宮

天皇が初めて伊勢神宮を訪れたのは、伊勢神宮創建（日本書紀）から一六〇〇年も後に、明治二年（一八六九）三月。この月二八日に行われた東京遷都に先立ち、明治天皇が十二日に外宮、続いて内宮を親拝した。この後も明治五年、十三年、三八年と計四度訪れている。大正天皇は病弱であったために大正四年（一九一五）に一度だけだが、その代わり皇太子、後の昭和天皇が大正四年、五年、八年、十年に二度、十三年と六度、即位後には昭和三年、四年、十七年、二〇年、二七年、二九年、三七年、四六年、四九年、五〇年、五五年と御拝されている。昭和天皇が皇太子時代も含めて二〇回近くも訪れているので、天皇は伊勢神宮に親拝するものという思い込みが誰にでもあるが、明治時代前には誰一人として一度も訪れていないのである。

一〇代崇神天皇は「神の勢いを畏れて、共に住みたまふに安からず。（日本書紀）」と言って、天照大神の祭祀を宮中から外に出したのである。しかも『延喜式（九二七）』に載る宮中三六神の中に、出雲神の事代主の名前はあっても、天照大神の名は無い。宮中の賢所に祀られたのは後世のこと。

明治時代の「国家神道」というものが、いかに日本本来の歴史と伝統からかけ離れた「作られた伝

統っばい文化」だったことの証拠のひとつ。ほとんどの日本人が、古代から天照大神の祭祀こそが、国家最大の祭事であったかのように思い違いをしている。それは古代の大和朝廷ではなく、近代の明治政府が決定したことに過ぎない。 <http://ameblo.jp/shimonose9m/entry-12106995436.html>

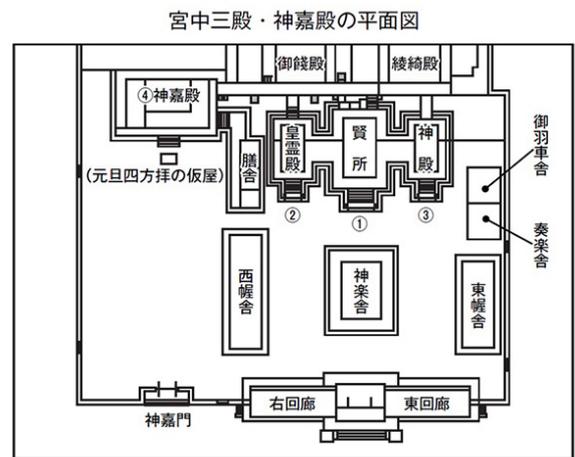
### ■ 皇居宮中三殿賢所

1889年(明治22年)1月9日：現在地に遷座。現在の社殿を造営。

宮中三殿は、皇居内にある三つの連結された建造物の総称である。それぞれ、神道の神を祀っており、宮中祭祀(皇室祭祀)の中心となる。宮中三殿の構内には、附属するいくつかの建造物が配置されている。

四方拝、新嘗祭が行われる**神嘉殿**(しんかでん)、鎮魂祭や天皇皇后の装束への着替えが行われる綾綺殿(りょうきでん)、神楽が行われる神楽舎(かぐらしゃ)、楽師が雅楽を演奏する奏楽舎(そうがくしゃ)、列席者が待機する左幄舎(ひだりあくしゃ)と右幄舎

(みぎあくしゃ)、賢所に正対する賢所正門、新嘉殿に正対する新嘉門などである。宮中三殿の祭祀は、明治維新から宮中祭祀の変遷と漸次的集約を経て、教部省が成立した直後の明治5年4月2日(1872年5月8日)に整ったと解されている。



**賢所**には皇祖神天照大神を祀る。その御霊代である神鏡(八咫鏡の複製)が奉斎されている。また「かしこどころ」と読んで神鏡そのものを指すこともある。古代より宮中で祭祀された。掌典及び内掌典が御用を奉り、「忌火」(「神聖な火」の意味)を護り続けるとされる。平安時代は温明殿(うんめいでん)、鎌倉時代以後は春興殿にあった。古代から続くという宮中祭祀が行われ、現在の皇后、皇太子妃など皇族の妃らを宮中に迎える結婚の儀もここで行われた。その際、后妃が賢所を退出した際に婚姻成立とみなされる。神聖な場所のため穢れを嫌い、「次清」の別などの厳格な規律があるという。

なお、宮中三殿のうち賢所は古代から宮中で奉斎されてきましたが、皇霊殿と神殿は、明治維新以降の宮中祭祀制度の再編成によって新たに宮中に遷座・奉斎されたものです。東京都千代田区千代田1-1

### 神殿

天神地祇八百万神が奉斎されている御殿で、明治5年3月に神祇省の廃止と共に宮中に遷座したのがその始まりで、三殿の中では最も後に成立しました。前項で記しましたように、明治2年6月、明治天皇は国是の確立を、天照大御神はじめ天神地祇八百万神と、神武天皇から孝明天皇に至るまでの歴代天皇の皇霊に御奉告のため、神祇官に霊代を設け招き祭らしめられ、御拝されました。そして同年、神祇官に神殿を設ける事が決まり、同年12月に仮神殿が竣工し、その中央の座に八神を、東の座に天神地祇を、西の座に歴代天皇の皇霊がそれぞれ奉斎され、鎮座祭が斎行されました。

明治4年8月、神祇官が廃され神祇省が置かれ、それに伴い神祇省に継承された神殿(西の座)に

奉斎されていた歴代天皇の皇霊は宮中賢所に奉遷されましたが、八神と天神地祇は引き続き神祇省の神殿にお祀りされました。しかし、翌5年に神祇省が廃止され新たに教部省が置かれる事になり、そのため同年3月、神祇省神殿に奉斎されていた八神と天神地祇を宮中に遷し仮に賢所拝殿に奉安せしめ給う旨仰せ出され、それを受けて同年4月、神祇省の神殿に奉斎されていた八神と天神地祇、及び京都の神祇伯白川家、神楽岡の吉田家斎場、有栖川宮家の旧邸と新邸にそれぞれ鎮座されていた八神を、御羽車に移し、賢所拝殿に奉遷しました。翌5年、八神と天神地祇の両座を合祀して一座とし、「神殿」と改称され、これによって現在の宮中三殿の原型が成立しました。

東京都千代田区千代田 1-1

## ■靖国神社

祭神は、幕末から明治維新にかけて功のあった志士に始まり、1853年（嘉永6年）のペリー来航（所謂「黒船来航」）以降の日本の国内外の事変・戦争等、国事に殉じた軍人、軍属等の戦没者を「英霊」と称して祀り、その柱数（柱（はしら）は神を数える単位）は2004年（平成16年）10月17日現在で計 246万6532柱にも及ぶ。

戊辰戦争終戦後の1868年（慶応4年）旧暦6月2日に、東征大総督有栖川宮熾仁親王が戦没した官軍（朝廷方）将校の招魂祭を江戸城西丸広間において斎行したり、同年旧暦5月10日に太政官布告で京都東山（現京都市東山区）に戦死者を祀ることが命ぜられたり（現京都霊山護国神社）、同旧暦7月10・11の両日には京都の河東操錬場において神祇官による1853年（嘉永6年）以降の殉国者を慰霊する祭典が行われる等、幕末維新时期の戦没者を慰霊、顕彰する動きが活発になり、そのための施設である招魂社創製の動きも各地で起きた。それらを背景に大村益次郎が東京に招魂社を創建することを献策すると、明治天皇の勅許を受けて1869年（明治2年）旧暦6月12日に現社地での招魂社創建が決定され、同月29日（新暦8月6日）に五辻安仲が勅使として差遣され、時の軍務官知事仁和寺宮嘉彰親王を祭主に戊辰の戦没者3,588柱を合祀鎮祭、「東京招魂社」として創建された。ただし、創祀時は未だ仮神殿の状態であり、本殿が竣工したのは1872年（明治5年）であった。



1865年、長州藩が奇兵隊の死者を祀るために建立した桜山招魂社が、靖国神社の起源である。その後、禁門の変、戊辰戦争などで戦死した長州軍の兵を合祀。明治維新後、明治天皇の上京にともない、天皇の錦の御旗が与えられることで、官幣の神社として靖国神社が設立された。

以上の経緯を踏まえると、靖国神社は、明治維新以降、実権を握った長州閥の意向が色濃く反映された神社だと言える。事実、会津藩家老を先祖に持つ右翼の大物・田中清玄は、靖国神社を「長州藩の守り神にすぎないもの」と切り捨てたという。

東北地方は、仙台第二師団のガ島玉碎、第36師団（雪部隊）のニューギニア玉碎はじめ、戦没者の多い地域だが、「靖国神社に参拝すべきだ」とする意見には異を唱える人が多い。「朝敵は弔わず」、これは賊軍に対する明治政府の一貫した姿勢だった。東北(奥羽列藩同盟)の犠牲者をはじめ、彰義

隊、西南の役の西郷隆盛側などは、靖国はもちろん、日本各地の招魂社（護国神社）にも祀ることはなかった。

そして、薩長中心による富国強兵政策の一貫としての軍事強化推進が、その後の日清・日露・大東亜戦争につながったと見るのが自然だし、靖国はその精神的支柱として存在した。今なお、“明治政府（官軍側）は素晴らしかったと絶対視”し、賊軍とされた地域のインフラ整備の後回しなど、東北蔑視政策が続くかぎり、多くの東北人が心から靖国神社を参拝する気持ちにはならないだろう。

そこには、薩長が天皇を人質同然にした当時の、「天皇陛下＝靖国神社だ。文句あるか」という、天皇の威光を利用するだけ利用した空気が流れている。それに比して、京都守護職を務めた会津藩主・松平保容は、孝明天皇から辰翰を賜り、正に官軍だった。明治26年12月5日松平保容公死後、辰翰の事実を知った明治政府は、この内容が公になれば、自分達が嘘で固めた歴史観が根底から覆えるとあわてた。

そして、明治政府は密かに大金で譲渡するように圧力をかけたが、会津藩・松平家はこれを頑強に拒否した。何度でも繰り返すが会津藩側が官軍、薩長土肥(明治政府)側が賊軍だったのだ。

それに薩長や岩倉具視らの戦略による錦旗の偽造や、孝明天皇の毒殺説も有力だ。これが薩長は「偽（にせ）官軍」と言われる理由であり、偽（にせ）官軍が天皇陛下の威光を利用するために作ったのが「靖国神社」という図式になる。

日本を再び戦争をする国家にさせようと企む人達にとっては「国のために命を捨てさせる」ための装置としてこの神社は象徴的な大きな意味をもつものなのでしょう。

<http://z-shibuya.cocolog-nifty.com/blog/2010/08/post-e1bb.html>

千代田区九段北3丁目1-1

## ■赤城出世稲荷神社・八耳神社・葵神社

### 赤城出世稲荷神社

祭神/宇迦御霊命 保食命。創記は詳らかではありませんが、赤城神社が当地にお遷るする以前（弘治元年〔1555〕）から地主の神と尊ばれ鎮座。出世開運のご利益があるとして大名・公家の崇敬を受けておりました。また穀物・食物を司る神様として、五穀豊穰、衣食住、商工業繁栄のご神徳を備えておいでです。現在は神楽坂商店街などの商売繁盛と近隣サラリーマンの崇敬を集めております。戦前まで5月5日の例祭日にはお神楽が奉納されておりました。

### 八耳神社

祭神/上官之厩戸豊聰八耳命（別称・聖徳太子）戦火で焼失した昔の「太子堂」です。この八耳様は「あらゆる事を聞き分ける天の耳」を持つ聖徳太子であり、聡明な知恵を授かることができます。なにか悩み事のある時は「八耳様・八耳様・八耳様」と3回唱えてからお参りすると、自ずと良い考えが浮かぶと伝えられる。また耳の神様として広く信仰を集め、耳の病気や煩いを治してくれるとして、全国各地から参拝に訪れている。合殿に大国主大神、丹生大神、を祀ります。

### 葵神社

祭神/徳川初代将軍徳川家康公。牛込西五軒町の天台宗宝蔵院に鎮座していたが、明治元年、神仏混合を廃止された際に當境内へ遷座。徳川初代将軍として江戸時代の政治、文化の礎を築き、近代日本の発展に多大な貢献をされました。かつては江戸市民の家康公への振興の対象でしたが、現在は神楽坂の「東照宮」として親しまれ、学問と産業の祈願成就を願って、参拝する方に心の安らぎを与えてくれます。

### (赤城神社)

正安2年(1300年)、後伏見天皇の創祀に際して、群馬県赤城山麓の大胡の豪族であった大胡彦太郎重治が牛込に移住した時、本国の鎮守であった赤城神社の御分霊をお祀りしたのが始まりと伝えられる。その後、牛込早稲田の田島村(今の早稲田鶴巻町 元赤城神社の所在地)に鎮座していたお社を寛正元年(1460年)に太田道灌が神威を尊んで、牛込台(今の牛込見付附近)に遷し、さらに弘治元年(1555年)に、大胡宮内少輔(牛込氏)が現在の場所に遷したといわれる。この牛込氏は、大胡氏の後裔にあたる。天和3年(1683年)、徳川幕府は江戸大社の列に加え牛込の総鎮守と崇め、「日枝神社」「神田明神」と共に、「江戸の三社」と称された。この三社による祭礼の際における山車、練物等は江戸城の竹橋から内堀に入り半蔵門に出ることを許されていた。その後、明治6年に郷社に列することになる。

東京都新宿区赤城元町1-10

### 護国寺

真言宗豊山派大本山。天和元年(1681)五代将軍徳川綱吉が、生母桂昌院の願いにより創建した祈願寺である。如意輪観音を本尊としている。後には将軍家の武運長久を祈る祈願寺となった。元禄時代の本堂、昭和3年に移築された月光殿は、ともに国の重要文化財に指定されている。明治期以降徳川家との関係が絶たれ、一般人の墓所を造成した。三条実美、山県有朋、田中光顕、大隈重信をはじめ、新政府の多くの偉人達が眠る。

東京都文京区大塚5丁目5-40-1

### 山県有朋

長州藩士。松下村塾の門下生。明治政府では軍政家として手腕をふるい日本陸軍の基礎を築いて「国軍の父」とも称される。西南戦争では西郷隆盛に恩義を忘れて自決を勧める書状を送っている。長州閥ばかりを周りに固めた。椿山荘は山県有朋の本邸です。

### 三条実美

尊攘派公卿。文久3年(1863年)には、中川宮ら公武合体派の皇族・公卿と薩摩藩・会津藩が連動したクーデター・八月十八日の政変により朝廷を追われ、京都を逃れて長州へ移る(七卿落ち)。維新後、太政大臣。

### 山田顕義

長州藩士、松下村塾門下生。榎本武揚率いる旧幕府軍を倒すため、箱館攻略の総参謀として赴任。初代司法大臣。日本大学・國學院大学の学祖。

## 田中光顕

土佐藩士です。脱藩して長州で活躍。中岡慎太郎が坂本龍馬と共に暗殺（近江屋事件）されると、その現場に駆けつけて重傷の中岡から経緯を聞いた一人。維新後、宮内大臣。

## 大倉喜八郎

大倉財閥創始者。明治・大正期に貿易、建設、化学、製鉄、繊維、食品などの企業を数多く興した日本の実業家。渋沢栄一らと共に、鹿鳴館、帝国ホテル、帝国劇場などを設立。代表的な企業・ホテルオークラ・大成建設・千代田火災海上・日清製油・東海パルプ・川奈ホテル・帝国繊維・サッポロビール・富士銀行・太陽生命など。東京経済大学の前身である大倉商業学校の創設者。

## 大隈重信

尊王派として活動した。慶応3年（1867年）、副島と共に将軍・徳川慶喜に大政奉還を勧めることを計画し、脱藩して京都へ赴いたが、捕縛の上、佐賀に送還され、1か月の謹慎処分を受けた。

維新後1873年（明治6年）5月、大蔵省事務総裁、10月から参議兼大蔵卿になった。

自由民権運動に同調して国会開設意見書を提出して早期の憲法公布と国会の即時開設を説く一方、開拓使官有物払下げを巡りかつての盟友である伊藤ら薩長勢と対立、大隈自身の財政上の失政もあり、明治14年（1881年）10月12日、参議を免官となった。いわゆる明治十四年の政変である。

明治15年（1882年）3月には小野梓とともに立憲改進黨を結成。大隈の外交手腕を評価する伊藤は、不平等条約改正のため、政敵である大隈を外務大臣として選び、明治21年（1888年）2月より大隈は外務大臣に就任明治31年（1898年）6月に板垣退助らと憲政党を結成し、同年6月30日に薩長藩閥以外からでは初の内閣総理大臣を拝命、日本初の政党内閣を組閣した。早稲田大学の創設者。

## 東楊寺

津軽藩代官足立氏の墓は江戸時代前期において弘前藩及び黒石領主（文化6年に黒石藩）の飛び地であった上州8ヶ村の支配を示す史跡です。津軽氏の支配は慶長6年（1601）から元禄11年（1698）まで続きました。この間、足立氏の初代及び2代源左衛門は、50有余年上州8ヶ村の管理を任され、代官を勤めていました。石田三成の三女の辰姫の墓がある。弘前藩は石田家の血筋。

群馬県太田市大館町1492



●典型的な引き寄せ型祭祀線。明治新政府は、伊勢神社内宮の天照皇大神を絶対神とし、全国の神社に順位をつけ従わせ、各家の神棚には伊勢大麻を納めさせ、神社や国民の気を内宮に集めて東京の皇居に送るしくみを作った。

●キャッチする皇居側のしくみだが、まず 1865 年（慶応元年）、長州藩が奇兵隊の死者を祀るために建立した桜山招魂社が靖国神社の起源とされる。宮中三殿は伊勢神宮内宮本殿から靖国神社本殿の距離と同じ距離に 1889 年(明治 22 年) 現在地に遷座された。これにより、伊勢神宮の神気を宮中三殿に引き寄せられる。靖国神社は、戦没者 246 万の霊を強制的に祀る。靖国神社に戦争犠牲者やその家族、そして多くの国民の気が集まれば集まるほど伊勢神宮の神気は高まり、皇居にも強力に引き寄せられる。総理大臣が参拝することは大きな神事となるのだろう。

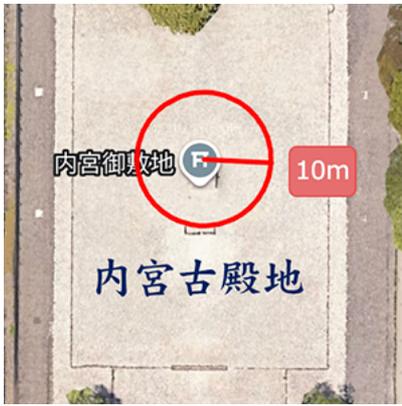
●同距離には他にも神社仏閣が配置された。地主神の赤城出世稻荷神社には、明治元年に遷座された新政府怨敵の徳川家康が祀られる葵神社が遷座。元々徳川家の祈願寺だった護国寺においては、一般人の墓所にして力を弱め、さらに新政府や長州藩出身の名だたる多くの偉人を眠らせた。群馬の東楊寺は家康に敗れた石田三成家に関わる寺である。他にも少しずれるが明治 6 年遷座の今宮神社、明治 9 年遷座の天日鷲神社も関係ありそうだ。

## 式年遷宮

●さて、伊勢神宮には 20 年に一度の式年遷宮がある。現在の社殿の隣に古殿地があるが、57m も離れている。こんなに離れていたら宮中三殿と同距離神社仏閣はずれてしまうのではないだろうか？他に同じ働きをする神社仏閣が配置されているのだろうか。

調べてみて驚いた…





●東楊寺のみ少しずれるが、（それでも 307.555km ラインは本堂屋根にかかっている）ほかは見事に全く問題ない。これは、これらの祭祀線が施されて皇居があることの裏付けとも言える。靖国神社をはじめこれらの神社仏閣は伊勢神宮のご神気を引くための役割を持たされているのである。

(2017年4月20日記)

(2025年2月18日再調査後に追記)

竜天太陽 記